増殖するネット社会で生きる我々が、対峙すべき課題

5年前の秋葉原事件に関連し当 HP に記事(HP「雑学 BN」の随想等関係(VI)、2008.06.14. 「身体能力の練習同様に、心の練習もあっていいのでは」:参照)を掲載したこともあったからか、店頭で「秋葉原事件~加藤智大の軌跡~」のタイトルが目に入り購読した。

筆者は「あとがき」に「私は可能な限り、加藤の見た風景の中を歩いた。できる限り彼を直接知る人と会い、話を聞いた。裁判も傍聴し、彼の言葉に耳を傾けた。そして、何とか彼の人生の輪郭と苦悩を描いてみた。」と記しているが、彼の「ネット掲示板」の書き込みの膨大な内容まで取材してることにも、圧倒される。

彼の母親は過剰なまでの教育熱心のあまり、小、中学校時代の作文や絵には全てチェックを入れたために、作品等は周りから賞賛を受るような「いい子」であったが、彼はそのことにいつも後ろめたさを感じていたが、その感情を言葉で表出することを抑制していったよう。

また、母親は厳しくしつけしようとし、問答無用と行動で叱責したがために、彼は他者 との本音・本心で語り合うコミュニケーションを軽視し「行動でアピールする」という習 慣を身につけてしまったよう。

彼のこの「いつもの行動パターン」が友人関係でも「キレやすいやつ」と思われ、また、 転職を繰り返しているが、会社を辞める時も急に出社しないという行動で退職の理由を会 社に気づかせようとしたよう。

こうした行動パターン故か、生身の日々は彼にとって単に「たて前」の社会であり、自らの心の内を言葉で表出できるのは「ネット掲示版」であり、唯一の「居場所」と錯覚して行ったよう。

だが、「ネット掲示版」は威名、仮名を使っての「なりすまし」と「荒らし」もある架空空間社会と分かりつつも、いつの間にか彼はその社会と、生身の社会との区分けが次第にできなくなり、唯一の居場所であったその社会でも疎外感を感じ、自己認識・自己存在感がなくなり「いつもの行動パターン」から犯行に至った彼の軌跡が鮮明に浮かび上がってくる書であった。

つい最近、ネット依存症の中高生が52万人と増加している報道があったが、今後益々増殖するであろうネット社会で、「日本人が対峙すべき現代社会の病巣を暴く」警鐘の書でもあった。

ネット社会の中で生きていかねばならないお子さんのために、今、子育て中の親御さん に、一読をお勧めする。